

ラテンアメリカ諸国の風景に欠かせないのが大小さまざまな広場である。それは十五世紀末に遡る、旧宗主国による征服と植民地時代の歴史を物語るものではあるが、長い歳月を経ることで、今や土地の風景に溶け込んでいる。ひとつには、あまり手を入れないうために、時間の堆積を感じさせるからだろう。街路樹ものびのび育って巨大化し、太い根が歩道の石畳を持ち上げ、どうだと言わんばかりにその力を見せていることも少なくない。

メキシコシティーの南にあるサン・アンヘル地区に、これまで出会ったなかで一番好きな広場がある。大通りから奥まった閑静な屋敷町の、いくつかの路地が迷路を描きつつ行き着く先にあるそれは、『ブラサ・デ・ロス・アルカンヘレス』すなわち《大天使たちの広場》という名前を持っている。周囲の屋敷の石造りの塀というよりはるかに大きな壁のひとつは、高さが一〇メートルはありそうで、それがブーゲンビリアに覆い尽くされているから、出遭った人は思わず息を飲むにちがいない。どっしりとした壁が幾何学的でない空間を作り、さながら植物園を思わせるために、息苦しさなどまったく感じさせない。植物たちはこの壁を抱くように生い茂っている。作家のカルロス・フエンテスもこの広場とそれを不規則に囲む壁たちを愛したひとりだ。

しかし、壁は何かを遮り、分断する。そのとき壁は人工的に作られた排他的装置となる。たとえばガザ地区を囲む壁。村上春樹がエルサレム賞受賞演説『常に卵の側に』で暗喩としてエレガントに言及した壁は、そんな壁のイメージを帯びている。それはゴヤが『一八〇八年五月三日、プリンシペ・ピオの丘での銃殺』に描いたナポレオン軍の銃殺隊のように無表情に建っている。アメリカ合衆国とメキシコを隔てるのもその種の壁だ。

一九八九年十一月、ベルリンの壁が崩れたとき、あたかもジョ

ン・レノンが歌う『イマジン』の歌詞の一部が現実となった気がしたものだ。そしてEUの設立。世界はユーフォリアに満ち溢れていたのではないだろうか。

だがEUが崩壊の危機に曝されている今、人はユートピアよりもデイストピアについて語る。ラテンアメリカの人々から《北方の巨人》と見なされてきた国の新たな大統領は、米墨国境に壁を作ると言っている。いったい彼はどんな壁をイメージしているのだろうか。少なくとも分断のための壁だから、美しくはないはずだ。サンデイエゴとティファナの間にはすでに塀がある。あれを巨大な壁にして万里の長城のように長く伸ばすとしたら、きっと《大天使たちの広場》の壁とは似ても似つかぬ、無機質でグロテスクなものとなるにちがいない。

メキシコの写真家マヌエル・アルバレス・ブラボが好んだテーマの一つが壁、とりわけ街の壁だった。彼が撮るのは、モノクロでありながら、息づき、表情を備え、排他性を感じさせない壁だ。その佇まいは、そこが少なくともデイストピアではないことの証となっている。その壁は、その向こうにもう一つの世界が広がっていることを感じさせる。それはこちらと地続きの世界かもしれないし、パラレルワールドかもしれない。その壁は、私たちを阻むのではなく、むしろもう一つの世界に誘っている。自分を閉ざさず開いていけば、私たちは壁を越え、そのもう一つの世界に行けるのではないか。ジョンの夢はまだ続いている。